

大保九 石井十次記念奨学生 初の卒業生

3/10 充実した学生生活 西山さんと小松さん

学校法人順正学園(加計美也子理事長)が運営する延岡市吉野町の九州保健福祉大学(高崎眞弓学長)で19日、学位記・修了証書授与式があり、2人が児童養護施設卒園者を支援する「十次記念奨学生」として初めて卒業した。



順正学園は、平成21年一た高鍋町出身の石井十次(宮崎県木城町)と二その児童福祉会(岡山市)と連携協力協定を締結。2法人の児童養護施設卒園者が順正学園が運営する高等教育機関の入試に合格した場合、入学金や学費などを免除する制度を設けた。

人の「石井記念友愛社」(臨床福祉学科4年)西山さんは友愛社の児童養護施設「石井記念友愛園(木城町)で生活して高鍋農高を、小松さんは友愛社の小規模児童養護施設「じゆうじの家」(高鍋町)で生活して高鍋高を卒業して入学した。



調印後に握手する加計理事長(右)と吉田副会長

この制度に該当したが、西山彰彦さん(22)社会福祉学部スポーツ健康福祉学科4年と小松愛沙美さん(22)同健康福祉学科4年と小松愛沙美さん(22)同授与式会場の体育館前で児嶋理事長(右)と話す西山さん(中央)と小松さん(左)19日、九州保健福祉大学

学生生活を送ったという。2人も社会福祉士の国家試験に合格。卒業と同時に社会福祉主事の資格を得た。

授与式で学業が優秀かつボランティア活動にいらした学生に与えられる「愛の十次賞」を受け、西山さんは「4年間のいろいろあったが卒業できてほ」としている。大学関係者などいろんな方々に助けてもらったと、今強く思う」と感謝。小松さんは、勉強はもちろん、ボランティアやバイトなどいろいろな経験できて、切り開いていく使命を背負った人間として私の志を引き継いでほしい」とエール。

西山さんは「施設で育った境遇にいたからこそ自分にしかできないことがあると思う。一番は子どもたちに信頼される人になりたい。小松さんは「自分の経験を生かして今の子どもたちが進みたい道に進め、なりたい大人になれるように支えたい」と話した。

友愛社からの十次記念奨学生は今月現在、2人を含めて8人が同法人の九州保健福祉大学、2人が吉備国際大学に在籍。西山さん(20)と小松さん(19)を5歳から知っている友愛社の児嶋草次郎理事長(69)は「團の時代、2人ともまじめでリーダーとして頑張ってくれた。2人の後ろ姿を見て後輩が奨学生として次々と続いている。」

「大学の4年間は成長するには素晴らしい時間。2人は大人として、福祉の“人財”として成長した。これは大学の先生のおかげ。先生、友だちに恵まれたと思う」と話し、2人の手を握って「卒業おめでとう」と祝福した。

4月から西山さんは鳥取県、小松さんは県内の児童養護施設で児童指導員として働く。児嶋理事長は「これからの社会的養護の子どもたちの夢を

講演する尾原さん



女性の活躍 自分がロールモデルに

3/20のべおか男女共同参画元旭化成の尾原さん

のべおか男女共同参画元旭化成(三原隆子会長)の設立20周年記念講演会は16日、延岡市東本小路の野口記念館であり、4年制大学卒女性として初めて旭化成に入社したことで知られる尾原登子さん(80)が「管理職よりリーダーを創りたい」と題して講演した。

尾原さんは、昭和37(1962)年東京大学教育学部教養学科アメリカ科卒業後、旭化成に入社。ニューヨーク留学を経て同43(1968)年に「ファッション・ビジネスの世界を翻訳出版し、服飾における消費者ニーズに応じた商品を提供するファッション・ビジネスの世界を飛び回り、そのめまぐるしい変化を見つめてきた尾原さんは、自身の経験を元に、女性が活躍するための意識や行動などについて話した。働き方を取り巻く環境の変化については、購入・レンタル・シェアを使い分ける「消費者の価値観の変化」、国境を越えた人や文化の共有、越境ネット販売につながる「グローバル化」、AI(人工知能)をはじめとするデジタル技術などを進展させる「技術革新」、本業を通じて社会問題解決を求められる「企業の社会的責任」を改革を促す4

大潮流とし、これらを女性活躍するための機会と捉えることの重要性を強調した。女性活躍を阻む問題の一つとして、男性中心

だった職場環境などによる「ロールモデルがいな(見つかりにくい)ことを挙げた尾原さんは、「自分がロールモデルになることを目指すべき」と呼び掛け。そのためのリーダーシップ・経営管理能力の開発を求め、「現代の企業はマネジメントの過剰、リーダーシップの不足が顕著。管理職よりも方向性を示して成長を促すリーダーになってほしい」と話した。会場には女性を中心に約300人の市民らが来場。経営者の姿も多く見られる中、尾原さんは女性に向けて主体性や向上

心、好奇心、情熱を持つことの大切さを訴え、「仕事と家庭について悩まず、両立するための努力をしてほしい」とした。また企業や社会に向けて

は「トップ自ら『女性が活躍できる会社にする』という宣言、実行を」と呼び掛け、時短やワークシェア、テレワークなどを活用した働き方の多様性を求めた。一昨年末まで企業経営を

していたという50代女性は「やる気を起こさせてくれるとてもいい講演だった。また機会があれば会社を起して女性の働きやすい環境づくりをしてみたい」と話した。